

Y4-11

肺塞栓症予防 整形外科の取り組み

武蔵野赤十字病院 整形外科¹⁾、
武蔵野赤十字病院 循環器科²⁾
小久保吉恭¹⁾、山崎 隆志¹⁾、守重 昌彦¹⁾、
佐藤 茂¹⁾、尾林 徹²⁾

【目的】当科における肺塞栓症対策の成果を検証すること。

【対象と方法】手術患者に肺塞栓症への対策がほとんどとられていなかった1990年から1999年までの10年間(6664例)を前期、診療科として肺塞栓対策を開始した2000年以降の10年間(8959例)を後期と定義し、両期間での肺塞栓症発生状況を比較した。後期症例にはリスクの階層化別に予防措置を行い、高リスク群に対しては当院循環器科の協力を得て、術後2日目に心電図によるスクリーニング(右心負荷所見の有無)も行った。

【結果】診断しえた肺塞栓症は前期8例(剖検2例、血管造影4例、超音波検査2例)、後期8例(CT7例、超音波検査1例)であった。基礎疾患は前期では全例が高リスク群であった(人工股関節4例、股関節骨折4例)、後期では高リスク群5例(人工股関節2例、人工膝関節1例、股関節骨折1例、多発骨折1例)、中リスク群3例(脊椎2例、下腿骨折1例)であった。高リスク群に分類される股関節手術における発症は前期では1.1%(742例中8例)、後期では0.2%(1307例中3例)であった。診断の契機となった臨床症状は前期では、心肺停止3例、呼吸困難3例、胸部痛1例、患肢腫脹1例であった。後期では呼吸困難3例、意識消失1例、胸部不快1例、全身倦怠感1例、無症候性(SpO₂低下のみ)2例であった。死亡は前期3例、後期1例であった。

【考察】肺塞栓症の発症には複数のリスクが重複しており完全な予防は不可能である。したがって症状のない肺塞栓症を早期に発見し治療を開始できるような対策も必要である。リスクレベルごとの予防、循環器科の協力による早期発見、クリニカルパス使用など組織的な対応は一定の成果をあげたと考えられた。

Y4-12

音楽放送によるインシュリン注射・血糖測定忘れへの定着状況

姫路赤十字病院 医療安全推進室
坂本佳代子^{さかもと かよこ}、黒田 尚美、小林 里美、
最所 裕司、五百蔵智明、喜多 良昭、
山本 繁秀、日下 幹生、上坂 好一

【目的】食前の血糖測定、インシュリン注射の実施を意識的に行うために音楽放送を取り入れた。音楽放送を患者の医療参加の機会とし、患者と医療者のパートナーシップを通じてケアの質、安全と相互信頼を向上させる医療安全全国共同行動目標⁸の活動として定着状況を調査する。

【方法】第45回日本赤十字医学会において、「音楽放送によるインシュリン注射・血糖測定忘れへの効果」について報告した。その後の定着状況を患者の医療参加の視点で調査する。入院時に血糖測定やインシュリン注射を必要とする患者に対し、音楽放送の目的を説明し、患者の医療参加のリーフレットを渡す。音楽放送の確認がなされたか、音楽放送から配膳までに血糖測定とインシュリン注射が実施されたか、患者のベッドサイドに配置したチェック表に患者と看護師が記載する。実施忘れがあった場合は、なぜ、忘れを引き起こしたか理由を振り返り、記載する。患者と医療者にとって音楽放送が意識づいているか割合評価する。患者や家族が配膳までに血糖測定、インシュリン注射が実施されていない場合は、医療者に確認しているか割合を示し、定着状況を評価する。